

船守神社

岬の歴史館サポーター 鳥越 克己

岬町へ来た間無しの頃の私はまだ船守神社のお祭りの事は知らなかった。

家を新築し有頂天になつてゐる反面で住宅ローンが重い礎を曳きずつてゐるような按配で回りの事にあまり関心を持つ余裕はなかった。そんな日々を過ごしている春めいた日だったと思うが自治会の役回りが巡つてきたのである。そして、後で知つたのだが自治会の役員の中に氏子さんがおられたのである。

「淡輪の番川のむこうにあらいて、知らんか」。まだ自分の所番地を知るのが一杯で、フナモリ様とかタンノワと言われてもパンガワと教えられてもまるで見当がつかなかった。私は新参者としてこの地に溶け込みたい一心と機嫌を損ねてはいけないとの思いで、曖昧に笑つていた。「九月にあ、岸和田のどんじりがあらよ、せいからひと月遅れてわいらの船守様の秋祭りやいて。十月の十四と十五や、十五日が宮入やさかいに夜も眠わう、ここからやと歩いて行けるさかいに來いや、わいも居てるさかいに、よ」それで初めて、ここにも村祭りがあることを知つた。そして船守神社は地元の鎮

守様で、親しみを込めた言い方をすれば船守様と言うことも知つたのである。

その年のお祭りには私は子ども手を引いて歩いて見に行つた。その頃、行く途中に牛小屋があつて角が生えたのを見て子どもは怪獣だと怖がつていた。行くのに車の道を避けて南海ガードの手前の怪獣の棲家から右に折れてまだ畑だった地道を辿り、西教寺のお墓の側を通つて畑の畦を歩いて番川へ出たのだつた。秋の釣瓶落としてすぐに暗くなり吹く秋風に汗ばんだ肌が心地良く、暗い家並みの向こうから野太い太鼓の音が聴こえてくると眠つていた博多のお祭り男を揶揄する「のぼせ者」の血がふつふつとして滾つてくるのだつた。子どもを引く手がかしく、私は肩車にして太鼓の音に向かつて急いだのである。

初めて目にしたお祭りの光景は生まれ在所の博多山笠の賑わいとは比べようがない。それでも船守様の拜殿前の大楠の亭々とした枝葉が下で火の灯つた提灯が揺れる山車の陰影は深く富み、太鼓の音は大洋の緩慢なうねりが打ち碎ける響きにも似て、松籟を思わせる笛の

音は白砂青松の往時を偲ばせて肅然と鳴り渡つてゐる。そうした風情は郷里のお祭りとは違つた感興となつて私の血を騒がせるのだつた。

船守様のすぐ近くに「堂組」の山車小屋がある。何時だつたか、もう随分前で忘れてしまつたがお祭りの準備で試験曳きをした後の休憩のときだった。船守様の拜殿前の大楠の木下闇で皆がビールを飲んでゐると、ふと沈黙が訪れた。そんな雰囲気の中、世話役の一人が不思議な話をした。それはヤグラの梶棒の付根の所に金輪がひとつだけ付いていて、それは子どもの頃からあり何の為にそこにあるかまるで判らないと言う話だけ付いていた。「ロープ掛けるんやうんか？」「そうやつたらもう片方にも要らつしよ、そやかてハナ（梶棒の先）に付けるんやつたら分かるんやが、そんなとこ付けてどないするんや」。

議論百出して後、衆議一決したのは「ワカラン」であつた。「ワカラン」と唸つたまま大楠を見上げた一人が次の思い出話へと暗転させた。「わいがまだ小んまい頃の話やが、この楠のあの股ん処に白蛇がすんでたんや。白い巳（み）は神さんの使いやよつてテングしちや



いかんて、よう言われたわ。時々姿見せるんやがほんまに真つ白やで。目と舌が真つ赤でなあ、最初はきしよいなあて見てたけど船守様の化身と思うと、つい手えあわせたりすんねんやなあ、信心やでほんまに」。ビール片手の大人たちが大楠を見上げる顔はその頃にタイムスリッブしたような表情になつていた。こうした話もいつかは潰えるのだらう。夏の終わりを告げる法師蟬が鳴きだして戻ることが叶わぬと遠くに過ぎ去つた日々を一時懐かしく思いださせるのであつた。

私は立ちほだかるようにして立つ悠久の大楠を仰ぎ見た。そしてこの世に私が生まれ存在し、今ここにあることを篤と御照覧あれと胸の内を叫んだ。